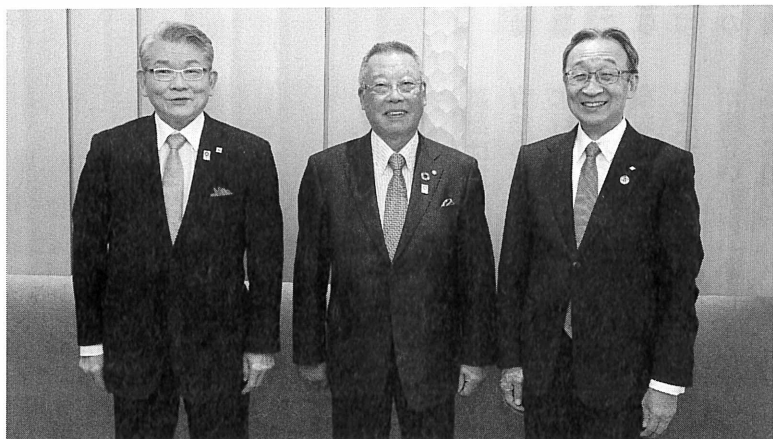


我らが母校・八尾高校の

「文武両道」「質実剛健」を理念に掲げる大阪府立八尾高校。卒業生の3氏も、長い社会人生活において三者三様に苦境期があったが「とにかく腐らず、明るく、逆境を乗り越えてきた」という。各々が高校時代に学んだ経験が現在の人格形成や経営者生活にどう生かされているのか。そして、若い世代へのメッセージとは――。



大阪府立八尾高校
1895年(明治28年)、大阪府第三尋常中学校として開校したのが始まり。1948年(昭和23年)に大阪府立八尾高等学校へ改称し、男女共学に。主な卒業生に、元財務大臣の塩川正二郎氏、元最高裁判事の奥田昌道氏、資生堂元社長の前田新造氏、演歌歌手の大月みやこさん、俳優の青木崇高さんなど。伝統的な「文武両道」「質実剛健」の理念は現在も息づいている。

出さずに、行っても休憩するだけでしたけど、自動車部の方は楽しかったですね。
―― 府立高校で自動車部というのは珍しいですね。
牧野 そうなんです。ちゃんと学校が認めた自動車部ですからね。昭和32年当時は車自体が珍しかったんです。顧問の先生がどこからルノーの中古車をもってきて、フラフラほつつき歩いていたらわたしが誘われて、自動車部に入ったんです。
当時は16歳で免許が取れたので、皆免許をとって車の運転の練習をしていました。学校の隣に繊維会社の草ぼうぼうの使っていないグラウンドがあって、そこを先生が借りてきたんでしょね。そこで自分たちで線を引いて運転する練習をしていました。

今だと怒られるかもしれませんが、12歳上の兄が車を持っていて、わたしも勝手に乗っていましたが、結構運転は上手かったです。その代わり、母からはよく怒られました(笑)。
―― 昔は本当に厳しい指導が多かったですね。
一柳 ええ。ただ、本当に悩んだのは受験と部活動の両立です。担任の先生は「お前冗談言うな」と言うんだけど、わたしは結構真剣に東大を目指していました。だから、ハンドボールもやらなアカン、勉強もやらなアカンということ、2年生までは部活をやったんですが、3年生になって先生に辞めさせてもらいました。
あれだけ極限まで両立させるというのは、他の学校ではな

良さと伝統を語ろう!

岩谷産業会長兼CEO **牧野 明次**
Makino Akiji

一柳アソシエイツ代表取締役 **一柳 良雄**
Ichiryu Yoshio

住友商事会長 **中村 邦晴**
Nakamura Kuniharu

質実剛健、文武両道が八尾高校の伝統

―― コロナ禍で暗い話題が多い中、経済リーダーたちの原点となる青春時代を振り返ってもらうことで、若い方に明日へ生きる希望を語ってもらおうと考えての企画です。今回は大阪府立八尾高校の卒業生の皆さんが集まっていたきました。牧野さんは高校時代にどのような思い出がありますか。

牧野 「剛健質実たゆまぬ元気」という校歌に代表されるように、やはり、質実剛健、文武両道というのが、八尾高校の伝統であると思います。

わたしが在学中は特に体育の授業が大変厳しかった。体育の先生に日本体育大学出身の方がいまして、体育が厳しすぎるから、八尾高校には進学しないという人もいたくらいです(笑)。
一柳 「ライオン」とか「鬼瓦」というあだ名のついた先生がいましたね(笑)。
―― それだけで雰囲気は伝

わってきますね(笑)。

牧野 特に嫌だったのが、冬の授業です。服装はトレパンにシャツ1枚。それも男子は運動場の片隅で着替えをしなくてはならず、寒風吹きすさぶ中で着替えをした記憶があります。

冬には耐寒マラソンというのがあって、回り一面田んぼの中を10キロ走らされるんです。寒いと言ってシャツなど着ようものなら、ビンタはあまり無かったけど、うさぎ跳びをさせられましたね(笑)。

中村 牧野さんとは9年違いますが同じですね。入学してから1カ月くらいは走ってばかり。最初は準備運動かと思っていたら、授業の45分間ずっと走らされるんです。だから、いつ終わるんかなあとずっと思っていましたし、文武両道とは言えなかった(笑)。
一柳 わたしもちょうど2人の真ん中の世代ですが、同じ印象です。本当に1周400メートルさき跳びをさせられたりしまし

たし、マラソンも当時の八尾は田んぼだらけでしたから、本当のあぜ道のようなところを走りますよ。時々肥溜めのような場所があつて臭かったし(笑)、雪が積もついても半分裸足で走っていましたから、その意味では相当鍛えられたんじゃないかと思っています。

中村 マラソン大会の時には八尾警察がきちんと交通規制をやっていましたよ。でも、わたしが3年生の時にもう警察の方で対応できないと言うから、生徒皆で喜んでいたら、長居陸上競技場に連れていかれて走られました。だから、そこまでやるかと思いました。

高校時代の友達は今でも一番濃いつながり

―― 心身ともに鍛えられたということですね(笑)。皆さん、クラブ活動は何をされていたんですか。

牧野 わたしは化学部と自動車部の2つを掛け持ちしていました。化学部の方はあまり顔を



いちりゅう・よしお
1946年1月茨城県生まれ。68年東京大学教養学科卒業後、通商産業省入省。93年近畿通商産業局長、96年総務審議官を経て、98年退官。2000年一柳アソシエイツ代表取締役&CEO。08年よりTVキャスターをつとめる。

一柳 同級生との一番濃いっながらと言ったら、生涯の伴侶を見つけた牧野さんじゃないですか（笑）。
—— え、奥様は高校の同級生なんですか。
牧野 そうなんです（笑）。もう出会って60年くらいになりますね。今もお互いに元気でやっていますし、よう辛抱していると思います（笑）。
一柳 牧野さんの仲人は八尾高校の大先輩・塩川正十郎さん（元財務大臣）だったんです。
牧野 ええ。家が近所でしたし、高校の大先輩ですから、よく可愛がってもらいました。

前へ、前へ進んでいきたい！
—— 八尾高校で学んだ精神が、後の社会人生活で何か役に立ったことはありませんか。
牧野 わたしが副社長、社長だった90年代後半から2000年代というのは、バブルが弾けて、会社が傾きかけた頃だったんですね。ですから、われわれは事業の選択と集中ということで、本業に徹して、要らない事業は遠ざけるようにしました。500億円くらいの損失が出まして、当時の500億円といったら、当社が潰れるくらいの規模です。われわれはそれを3

先生が振り向きざまにチョークを思いっきり生徒に投げつけるんです。
ところが、悪い生徒に当たらず、普通に真面目に授業を聞いていた生徒に当たったりするわけですよ。それで先生に文句を言ったりするんですけど、「うるさい」と言われてお終いです（笑）。
牧野 わたしも授業中に会話をしていたら、英語の先生に怒られて黒板消しをやらされました。だから嫌々ながらに、わたしが黒板を消すんですが、先生は「汚い、もつときれいに消せ！」と言われたものです。
—— そういう問答無用のスパルタ的な校風だと（笑）。
中村 ええ。良く言えば、骨太な人材を育てようとしていたんでしょね。もつとも、わたしは中身は繊細ですが（笑）。
牧野 繊細と言ったらわたしの方ですよ（笑）。わたしがツラかったのは懸垂の授業。われわれの時は全員が蹴上がりできないとダメなんです。だから

先生が振り向きざまにチョークを思いっきり生徒に投げつけるんです。
ところが、悪い生徒に当たらず、普通に真面目に授業を聞いていた生徒に当たったりするわけですよ。それで先生に文句を言ったりするんですけど、「うるさい」と言われてお終いです（笑）。
中村 わたしも授業中に会話をしていたら、英語の先生に怒られて黒板消しをやらされました。だから嫌々ながらに、わたしが黒板を消すんですが、先生は「汚い、もつときれいに消せ！」と言われたものです。
—— そういう問答無用のスパルタ的な校風だと（笑）。
中村 ええ。良く言えば、骨太な人材を育てようとしていたんでしょね。もつとも、わたしは中身は繊細ですが（笑）。
牧野 繊細と言ったらわたしの方ですよ（笑）。わたしがツラかったのは懸垂の授業。われわれの時は全員が蹴上がりできないとダメなんです。だから



まきの・あきじ
1941年9月大阪府生まれ。65年大阪経済大学経済学部卒業後、岩谷産業入社。88年取締役就任。90年常務、94年専務、98年副社長を経て、2000年社長就任。12年より会長兼CEOをつとめる。

つたと思います。
中村 わたしは、クラブ活動はしませんでした。たまに授業を抜け出して草野球のようなことをしていました。別に怒られることもありませんでした。でも、覚えているのは、秋の体育祭が近づいてくると、応援のモニュメントをつくったり、仮装大会のリハーサルをしたりして、体育祭のある2、3週間前から授業はほとんど出ませんでした。
—— それは先生も黙認しているということですか。
中村 そうですね。先生は皆厳しかったけど、あまり細かい

ことは言わなかったですね。体育祭の後、打ち上げで皆で食事に行っても「早く帰れよ」と言われるくらいで、大らかなところもありました。
だから、その分、体育の授業が厳しいわけです。夏の水泳は本当に地獄で、プールで25分を潜水するんですが、途中で立ち上がる生徒がいたら全員やり直しになる。だから、体育の後の授業は皆グッタリして居眠りしていました。
—— そういう時の先生の反応は？
中村 数学の授業では、生徒が授業中に会話をしていると、

先生が振り向きざまにチョークを思いっきり生徒に投げつけるんです。
ところが、悪い生徒に当たらず、普通に真面目に授業を聞いていた生徒に当たったりするわけですよ。それで先生に文句を言ったりするんですけど、「うるさい」と言われてお終いです（笑）。
中村 わたしも授業中に会話をしていたら、英語の先生に怒られて黒板消しをやらされました。だから嫌々ながらに、わたしが黒板を消すんですが、先生は「汚い、もつときれいに消せ！」と言われたものです。
—— そういう問答無用のスパルタ的な校風だと（笑）。
中村 ええ。良く言えば、骨太な人材を育てようとしていたんでしょね。もつとも、わたしは中身は繊細ですが（笑）。
牧野 繊細と言ったらわたしの方ですよ（笑）。わたしがツラかったのは懸垂の授業。われわれの時は全員が蹴上がりできないとダメなんです。だから

先生が振り向きざまにチョークを思いっきり生徒に投げつけるんです。
ところが、悪い生徒に当たらず、普通に真面目に授業を聞いていた生徒に当たったりするわけですよ。それで先生に文句を言ったりするんですけど、「うるさい」と言われてお終いです（笑）。
中村 わたしも授業中に会話をしていたら、英語の先生に怒られて黒板消しをやらされました。だから嫌々ながらに、わたしが黒板を消すんですが、先生は「汚い、もつときれいに消せ！」と言われたものです。
—— そういう問答無用のスパルタ的な校風だと（笑）。
中村 ええ。良く言えば、骨太な人材を育てようとしていたんでしょね。もつとも、わたしは中身は繊細ですが（笑）。
牧野 繊細と言ったらわたしの方ですよ（笑）。わたしがツラかったのは懸垂の授業。われわれの時は全員が蹴上がりできないとダメなんです。だから



なかむら・くにはる
1950年8月大阪府生まれ。74年大阪大学経済学部卒業、住友商事入社。2005年執行役員、07年常務、09年専務、12年副社長を経て、12年社長就任。18年より会長を務める。

一柳 やはり、河内で育つとそういうシーンを見ても動揺しないんですよ(笑)。

中村 それはあるかもしれない。向こうはラテンの人たちですから、こちらが指示しても期日通りに上がってきたりしないわけですよ。わたしがいくら怒っても「ノープロブレム」で終わりですから。だから、それくらい図太い神経を持たないとやっていけない(笑)。

これは高校時代に鍛えられたのかもしれないね。

—— わかりました。一柳さんは官僚の道を選ばれたわけですが、高校時代の経験が仕事に

活かした事例はありますか。

一柳 ワイルドさと根性というところで思い出すのは、やはり、田中角栄さん(元首相)です。すよね。わたしは角栄さんが通産大臣だった時に秘書をやりました。その時、印象に残っているのは、こういう言い方をすると悪いですが、角栄さんは学歴が無く、それでも日々、われわれのような東大出の官僚たちを従えているわけですよ。

だから、よく言われたのは、われわれは理屈で物事を考えすぎることです。角栄さんは理屈で考えず、世の中というのは本当に水が高きから低きへ

流れると。こういう本質的な物事の流れを読んで手を打てと。理屈なんて後からくつつければいいんだということ、これはわたしにとつてもものすごく刺激になりました。

—— 何事も本質を見抜くことが大事だということですね。

一柳 ええ。もう一つは、葬式の話はすぐに知らせると。毎日のように結婚式や葬式の話が来るんですが、角栄さんは大臣だから忙しいわけですよ。だから、わたしが葬式の話を翌日に報告したんですよ。

すると結婚式は出席できなくてもまだ後があるからいいと。しかし、葬式は違う。人が亡くなった話はすぐに知らせろということ、ものすごく怒られました。

わたしは大臣の公務が落ち着いた時に報告しようと思っていたと言ったら、必要か必要でないかを決めるのは自分だと。特に人の不幸やミスなどの悪い話は心の中にとどめずに、すぐ持つてこいというわけです。

悪い話は早いうちに報告してくれば、火の小さいうちに消すことができる。しかし、火が大きくなってからでは、消火するのに時間がかかるということ、本当にそうだと。この人は本当にすごいと思いました。

人のために汗をかき人が出てきてほしい

—— 最後に現役時代の在校生を含めて、若者へメッセージを頂戴できますか。

牧野 やはり、何事も辛抱して続けることが大事です。先ほどの中村さんの話ではありませんが、わたしも専務になった後、一度会社を辞めて子会社の社長になったんです。そうすると、周りの人たちが一気に冷たくなるんです。年賀状は来なくなるし、一度お目にかかりたいと言っても「何の用件ですか?」と言って取り次いでくれない。

それでも、そこは辛抱して、自分がやるべきことを続けていけば、誰かが必ず見ていてくれ

ます。今の若い人たちを見てい

ると、辛抱が足りなくて、すぐに投げ出してしまったりするんですが、環境を嘆いていても何の解決にもなりません。

とにかく腐らず、明るく、楽しく、賑やかに仕事をしていけば、皆がついてきてくれる。だから、置かれた環境を嘆くのではなく、仕方ないと割り切って、一生懸命に目の前の仕事に取り組みることが大事だと思います。

一柳 わたしも官僚の仕事を辞めた途端、95%くらいの方がわたしの傍からいなくなりました。電話してもつないでくれました。役所を辞めた3年間くらいはしんどい思いをしました。

でも、そこで思ったのは、自分は肩書を外したら何もなかったということ。だから、わたしが言いたいのは、肩書で勝負するのではなく、自分の名前で仕事ができる人になろうということです。

—— 肩書ではなく、自分の

人間力で勝負しようと。

一柳 そうです。一度しかない人生ですから、自分が納得する人生を! 若い人には何か夢をもって、世の中のためにやることをしようと。だから、夢や志をもって世界に飛び出して行ってほしいと思いますし、「Just do it」の精神でチャレンジして行ってほしいと思います。

中村 わたしも若い人に言いたいのは、夢をもって、正々堂々と自分がやりたい道を進んで行ってほしいということですね。

自分自身がいろいろな失敗をしてきたから思うんですが、人間というのは弱いもので、失敗したり、目の前の壁にぶつかったりすると、すぐに言い訳を考えたり、逃げ道を探してしまうんです。

でも、そんなことを考えても何の問題解決にもならない。間違ったことは間違いだつたと自分の非を認めて、正直に相談すれば、周りの人たちは対応策を

考えてくれます。これは日本だけでなく、世界中、どの国の人も基本的には同じだと思います。

ですから、弱ければ弱いほど逃げ道を考えようとするんですが、それは違うと。正々堂々と取り組んでいくことで、味方になってくれる人や自分のやり方を認めてくれる人を増やしていくことが大事だと思います。

—— 三者三様に挫折というか、苦境期を乗り越えて現在があるということですね。

牧野 わたしがお願ひしたいのは、人の世話を焼いてほしい



大阪府立八尾高等学校校長
藤井 光正

「文武両道」「質実剛健」は八尾高校の背骨。スローガンではなく本気で突き詰めるのが八尾高校流です。頑丈な背骨を持った骨太な卒業生の皆様が財界をはじめ各界でご活躍されていることは、校長として心強い限りです。

100年先も骨太なリーダーを育てる八尾高校であり続けるため、伝統の「八尾高流」を継承し、卒業生が多様なロールモデルを示してくれることを切に願っています。

ということなんです。わたしも昔、同窓会の会長をやらせていただきましたけど、幹事をやってくれる人が最近では少なくなりました。もちろん、仕事が忙しいというのはあるんですが、世話を焼かない人はダメですよ。人の面倒を見れば、やがて必ず自分にも返ってきますから。

一柳 たらいの水と一緒に水を向こうへ、向こうへ回していけば、いつの間にか自分のところに戻ってきます。そういう意味で、人のために汗をかき人が出てきてほしいと思いますね。